

平成二十九年十月の收穫（乾）

土屋 博

I 「第五十八回神田古本まつり」より

一 「詩人西行」中龍児著

（民友社、明治三十三年六版、定價拾參錢、一三五頁）

古書價格四百圓也。目次は、西行前記佐藤義清、西行後記圓位上人、旅行家西行天然と人、西行の性格其の生涯、詩人西行、西行の理想、西行と武士道、晩年と終焉。冒頭の書き出しは左の如く流麗なり。「紅花綠柳の洛陽に、決然袂を拂つて、萬丈の紅塵を去り、孤影飄然として、白雲流水に伴なひ、宇宙を醒覺大觀して、一世に超脱奔逸せる、絶大詩人の生涯は、灑々慕ふべきものある也」と。

二 「日本學生寶鑑」井上哲次郎著

（大倉書店、明治三十七年刊、定價金八拾五錢、本文六九三頁）

古書價格三百圓也。二度目の購入なれどその價值有り。

著者は井上哲次郎（一八五六年生れ、一九四四年歿）なり。井上は、筑前大宰府の出身にて、菅原道眞の再來と謳はれたる秀才。東大の一期生。獨逸等留學六年餘りを経て歸國、やがて日本人として初の東京帝大哲學科教授となりたる人物。本書を繕くに冒頭は教育敕語の日本語、その漢譯及び英訳あり、次いで五箇条の御誓文、軍人敕諭と續く。口繪として菅原道眞、孔子、ソクラテス、アリストテレス、シェクスピア、カント、ゲーテ、ダーウキンの肖像畫あり。本書を執筆したる趣旨は序にある通り、「青年の志を立て之れを達するに必要なりと思惟する古賢先哲の智識を蒐集し、又之れに加ふるに自ら見る所を以てし、尙ほ卷末に青年の志氣を鼓舞し併せて美的趣味を養成するに資すべき和漢古今の詩歌等を編入し輯めて一書」としたる由。中學校、師範學校生徒の座右の伴侶たることを目指せり。本書の構成は、第一篇「自己修養の方法」、第二篇「處世及び成功の方法」、第三篇「衛生上の注意」、第四篇「書齋の樂み及び讀書法」、第五篇「宗教に対する注意」、第六篇「美的趣味の養成」、第七篇「禮法」までが井上自身の意見となり居れり。

特に興味深きは第四篇にて、「書齋は頭腦の反射」にて、「書齋を亂雜蕪雜ならしめて一向平氣で居ると云ふやうなことならば、矢張り其の人の精神状態がさう云ふ有様である」とのくだりには、亂雜なる書齋の運営管理者としての小生、内心忸怩たるものあり。

第八篇は「自警及び座右銘」にて、聖徳太子の十七条憲法、武田信玄の家訓、石川丈山の壁書、中江藤樹の學舎座右戒、山鹿素行の自警、伊藤仁齋の書齋私祝、貝原益軒の家訓、徳川光圀の壁書、伊藤東涯の自警、松平樂翁の樂亭壁書など蒐集せらる。たとへば、室鳩巢の自警條目には、「毎朝卯前後可起、毎夜子前後可臥」とあり、生活振りの指針を示す。

第九篇は「先哲遺訓」にて、「聖徳太子曰く、人尤惡なるはなし、能く教ふれば之れに従ふ」、「菅公曰く、未だ會て邪正に勝たず」、「貝原益軒曰く、人生れて學ばざれば生れざると同じ」、「伊藤仁齋曰く、書を讀むは當に沙を掬して金を拾ふがごとくすべし、取ることは其の廣きを欲し、撰ぶことは其の精しきを欲す」等の滋味深き言葉の數々竝ぶ。

第十篇は「古今詩選」、第十一篇は「和歌」、第十二篇は「俳句」、第十三篇は「西洋國歌」なり。附録として、井上自作の「孝女白菊詩」（漢文）、及び落合直文による新體詩「孝女白菊の歌」掲載せら

る。當時一世を風靡し、外國語にも翻譯せられたるものなり。

かくなる書籍を愛讀し、志を立つる若者、當時數多居りたるに相違無し。

三「現代名文集」甫守謹吾編

(益友社、大正二年刊、定價金貳圓七拾錢、一〇三二頁)

古書價格四百圓也。たとへば、芳賀矢一の「月雪花」より、「煌々たる活動の日の光西に沈めば玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は溫和で日光のやうに峻烈ではない。」と。大町桂月の「百花譜」より、「郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色かなしみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲、秋の恨を語る。」と。

四「趣味修養 國民掌典」大町桂月閱、馬場峰月編纂

(帝國實業學會、大正四年四版、正價金貳圓五拾錢、一五〇二頁)

古書價格五百圓也。本書を購入するは二度目なり。新渡戸稻造、序に曰く、「英吉利の諺に『何かの事は何でも知り、何の事でも何かを知る』と云ふ事がある。一は専門の智識の深きを貴び一は普通學の廣きを重ずるの意である。・・・如何せん我國今日の普通教育は未だ科學的範圍に及んで居らぬ

五「日本及日本人 大正六年一月號」

(政教社、大正六年一月刊、定價金八拾錢、七三〇頁)

古書價格四百圓也。特集は「學界の代表的研究」(七十餘博士)。三宅雪嶺主筆は「人類の勝利」を執筆。曰く、「人類の勝利とは言ひ換ふれば自然界の征服にして人類の自然界に對する勝利を指す」と。志賀潔醫學博士「結核病の撲滅を期す」より、「或は吾人數代の後始めて此目的に到達し得べきものなるやも知るべからずと存じ候へども、人生の最大勁敵たる、結核を撲滅せずんば止まざるの覺悟に御座候。」と。

六「邦文日本外史」頼山陽著、池邊義象譯述

(教文社、大正十年初版、定價金四圓五拾錢、一五七二頁)

古書價格千圓也。函入。本書の購入は數冊目なるも、今回の状態頗るよし。

七「縮刷合本 即興詩人」森林太郎譯

(春陽堂、大正十五年二十版、定價金貳圓六拾錢、本文五六四頁)

古書價格五百圓也。縮字印刷の初版は大正三年。此の震災後校訂縮刷版にはルビ有り、極めて貴重。原本及び校訂前縮刷版にはルビ無し。ちなみに春陽堂原本は明治三十五年刊。なほ、原本の復刻版は、昭和五十九年にぼる。出版より刊行せらる。

八「日本文法講義」山田孝雄著

(東京實文館、大正十五年訂正四版、定價金四圓五拾錢、本文五一四頁)

古書價格二百五拾圓なり。本の状態は惡し。日本大學高等師範部の爲の講義草稿なり。

九「大日本文庫儒教篇 先哲叢談」

(春陽堂、昭和十一年刊、非賣品、五六一頁)

古書價格五百圓也。至誠堂學生文庫(大町桂月譯)にはなき先哲叢談後篇(山鹿素行を含む。)をも収録す。

十「中國詩選」鹽谷溫選

(弘道館、昭和廿八年第三版、定價三八〇圓、本文六一五頁)

古書價格五百圓也。初版は昭和九年。鹽谷溫は一八七八生れ、一九六二年歿、東京帝國大學教授。漢學者鹽谷青山の子息、大伯父は鹽谷宕陰。

十一「荷風全集第二十五卷」

(岩波書店、昭和四十年刊、定價六百圓、五三二頁)

古書價格百圓也。斷腸亭尺牘、書簡集、補遺を収録す。明治三十三年より昭和三十四年までの書簡なり。

十二「江戸詩人選集第八卷 頼山陽 梁川星巖」入谷仙介注

(岩波書店、平成二年刊、定價三千三百圓、三五九頁)

古書價格三百圓也。頼山陽の詩、此処にては、青春の彷徨、鎮西の旅、生活の詩人、母・永遠の戀人の四分野に絞り取り上ぐ。

十三「和歌に見る日本の心」小堀桂一郎著

(明成社、平成十五年刊、定價三千五百圓、五七一頁)

古書價格三百圓也。平成一四年に刊行せられし「平成新選百人一首」の姉妹篇乃至は補遺篇の性格を有する書なり。小生の蔵書、川田順「幕末愛國歌」につきて稀覯本の最たるものとの記述あるは我が意を得たり。

(平成三十年一月七日受附)